

33 日本家政学会十年の研究と発展

(家政学の諸問題・第5報)

大妻女子大 前川 当子

戦後、新学制が敷かれるに際し、女子の大学が出現しそれともなつて、家政学部の誕生となつた。これにより家政学の重要性についての認識から、その研究に、われわれは努力をそそいだ。日本家政学会は今年で10周年の日時を経て、研究発表機関として、家政学の発達に役立ってきている。さきに、わたくしは、日本と米国の家政学雑誌の研究調査を行い、その傾向や分類を行つて報告をしたが、今回は、日本家政学雑誌10年間の時を期して、No.1からNo.38に至るものの研究報告とその内容を検討して、まとめた結果を発表する。雑誌掲載分は、家政学研究の一現象にすぎないかもしれないが、その醗酵状態をうかがうことで、その目的を達すると考えるからである。わたしは、さきに、「家政学の本質は適応科学である」との一試論を報告し、さらに前回の報告で「家政学の体系というものは、内外の諸環境の変化に従つて組織され、内容づけられるものである」と見解を述べた。今回の報告は、さきの発表の実証的の意味をもつものであろうとおもう。それは、“家政学の特色はたえまなく変化して、新しい要求、新しい環境に自身を適応させてきている”という性格を持っていること